旅・いろいろ地球人

「河西回廊・石窟寺紀行」　　末森薫（国立民族学博物館機関研究員）

（1）　武威・天梯山石窟　2019 年 9 月 7 日刊行

中国の北西部、甘粛省（かんしゅくしょう）と青海省（せいかいしょう）の間を走る祁連（きれん）山脈の北側には、東西に伸びる平地が続いている。中国大陸の北部を流れる黄河の上流より西に伸びることから「河西回廊（かせいかいろう）」と呼ばれる。『漢書』「西域伝」の冒頭には、前漢の武帝が河西回廊一帯を占拠していた匈奴（きょうど）を撃退し、回廊沿いに武威（ぶい）、張掖（ちょうえき）、酒泉（しゅせん）、敦煌（とんこう）の四つの拠点（河西四郡）を設置したことが記されている。回廊沿いに築かれたオアシス都市を経由し、東から西へ、西から東へ、人びとや物資、文化が行き交ってきた。インドで誕生した仏教も、河西回廊を通って中国に伝えられた。回廊沿いには仏塔や石窟など仏教に関連する数多くの史跡が残されている。

武威の中心部から南東 45 キロに位置する天梯山（てんていざん）石窟には、南北朝や唐に造られた 19 の窟の中に、塑像や壁画が残されていた。しかし、1959 年に黄羊河ダムが建設された際、浸水する危険性から 42 体の塑像、300 平方メートルに及ぶ壁画が取り外され、移送された。現地には、防水壁に囲われた大仏と各 2 体の菩薩、弟子、力士の像だけが佇んでいる。2013 年、現地に戻すことを前提に、武威の西夏博物館で取り外された一部の塑像・壁画の保存修復が始まった。窟の中に再び戻れるかは分からないが、天悌山の地に帰る日は近いかもしれない。

防水壁から望む天悌山石窟の大仏たち＝中国・甘粛省で 2016 年 8 月、筆者撮影

（2）　張掖・金塔寺石窟　2019 年 9 月 14 日刊行

河西（かせい）回廊の中ほどに位置する張掖（ちょうえき）は、河西四郡の東から二つ目にあたる。その名は、前漢の武帝が匈奴（きょうど）を駆逐し、国の勢力が掖（腋（わき））を張ったように広がったことを意味するという。水と土に恵まれ、産物が豊富に採れることから「金の張掖」とも呼ばれ、唐代には現在の甘粛（かんしゅく）省の由来となる「甘州（かんしゅう）」と称された。

張掖の南にはテュルク系・モンゴル系の少数民族ユグル（裕固（ゆうこ））族が居住する自治県があり、県境には七カ所の史跡で構成される馬蹄（ばてい）寺石窟群が位置する。そのうちのひとつである金塔寺（きんとうじ）石窟は、地上より 60 メートルの崖面につくられた。山中を進み、崖面を登って、ようやくたどり着くことができる。周辺には、石窟以外に人工物は見当たらない。

金塔寺石窟を構成する二つの窟は、ともに空間の中心に方形の柱を設け、そこに仏や菩薩（ぼさつ）の像を配している。中心柱窟と呼ばれるこの窟形は、中国の南北朝時代に多く登場した。もともとは構造物の中心にストゥーパを配したインドのチャイティア（塔廟（とうびょう））窟を起源とする。礼拝をおこなうものは、その周囲を回ることで功徳を積んだ。人里離れた山中の崖面に窟をつくるには、相当な時間や労力を要したに違いない。礼拝をおこなう空間が、当時の人びとにとっていかに特別なものであったかを考えさせられる。

崖面にこつ然と姿をあらわす金塔寺石窟＝中国甘粛省で 2016 年 8 月、筆者撮影

（3）　酒泉・文殊山石窟　2019 年 9 月 21 日刊行

河西（かせい）四郡の東から三つ目にあたる酒泉（しゅせん)、その名を目にし、心おどる読者もいるであろう。前漢の武帝の命を受けた将軍・霍去病（かくきょへい)）は、河西回廊一帯を支配していた匈奴（きょうど）を撃破することに成功した。その報せを受けた武帝から勝利の祝酒が送られてきたが、兵士全員にいきわたる量はなく、酒は泉に流し込まれた。すると、いくら飲んでも湧き続ける「酒の泉」ができたという。そんな泉があれば恩恵にあずかりたいところだが、現在公園となっている伝説の泉から、酒の香りは漂ってこない。

酒泉市の南約 15 キロ、嘉峪山（かよくさん）の山中に文殊山（もんじゅさん）石窟がある。北涼（397 年～439 年）の創建とされることが多いが、現存する早い時期の窟は北魏（439 年～534 年）につくられたとする見方が強まっている。文殊山石窟には、前山と後山に分かれて百を超える洞窟が開かれているが、扉を付け管理されているのは、壁画や塑像が残る一部の洞窟のみである。礫（れき）を多く含む地層につくられたからか、風化が激しく、野ざらしで放置される窟も多い。

文殊山石窟では宋代以降、仏教の他に、儒教、道教、チベット仏教なども信仰された。山々には 70 余りの古建築が建っている。仏教を信仰する場は、長い年月を経て、さまざまな宗教が共生する聖地へと変化していったのである。

文殊山石窟の洞窟とチベット仏教寺院の旗＝中国・甘粛省で 2016 年 8 月、筆者撮影

（4）　敦煌・莫高窟　2019 年 9 月 28 日刊行

河西（かせい）四郡の最も西にある敦煌（とんこう）は、その近郊に玉門関（ぎょくもんかん）と陽関（ようかん）の二つの関所が築かれるなど、中国と西域の出入り口として長らく栄えてきた。しかし、シルクロードの交易が下火となり、その活気は失われていった。1900 年、道教僧の王円籙（おうえんろく）が偶然に発見した大量の文書により、敦煌は再び脚光を浴びることとなる。故井上靖氏は、小説『敦煌』の中で文章の謎に迫り、西田敏行氏と佐藤浩市氏が主演する映画にもなった。

文書が発見された莫高窟（ばっこうくつ）は、敦煌市の南東約 20 キロに位置する。1600 メートル以上におよぶ崖面には、1000 年以上の時を経て、700 以上の洞窟が開けられた。洞窟には 2000 体を超える塑像、4 万 5000 平方メートルにおよぶ壁画が残されている。

最も広い面積に描かれた壁画は、無数の趺坐仏（ふざぶつ）を並べた千仏図である。その描写は一見単調であり、壁面の隙間を埋めるために描かれたとも捉えられていた。しかし、千仏図の描き方を詳細に調べると、あるルールに則り配色されており、宗教的な空間をつくる上で視覚的に重要な役割を担っていることが分かってきた。

長い年月の中で壁画は変退色し、石窟を照らす光の特性も変わった。空間を彩ってきた千仏図も描かれた当時とは大分と印象が異なっているであろう。壁画の色や光の環境を再現し、石窟の空間を新たな視点から捉えなおしたいと考えている。

数多（あまた）の洞窟が並ぶ莫高窟の崖面＝中国・甘粛省で 2016 年 8 月、筆者撮影